

正妻戦争　一キリト
オールスターズ

玖蘭 蒼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「正妻戦争」――

それは無自覚系ハーレム主人公とそのヒロインたちに訪れる試練

正妻の座は一つのみ

その座を求めてヒロインたちはそれぞれの姿の想い人をパートナーとし、戦う

※番外編は100%ギャグパートなのでそこから読んでも全然大丈夫です

注意！

原作死亡キャラ生存といつても、茅場さん、ディアベルはん、コーバッツ、月夜の黒猫団、ラン、ゼクシード、薄塩たらこ、ライオス、アドミニストレータ、整合騎士の面々、ガブリエル等は変わらず死亡扱いです。ファンの方申し訳ありません。

また、原作小説18巻までもしくはアニメ4期までの内容のネタバレが含まれますのでご注意ください。

目次

番外編

その1

第1部 第1章 プロローグ

第一話 すべての始まり | 9

第二話 ヒロインたちの決意 | 16

第三話 戦の地へ | 20

第四話 観戦者たちの憂鬱 | 24

第1部 第2章 正妻戦争 開戦前

第五話 開戦前 | アスナとリ |

フアー | 29

第六話 開戦前 | シリカとリスベツ |

ト | 35

第七話 開戦前 | シノンとアリス |

第八話 開戦前 | ロニエとあの人 | 42

第1部 第3章 正妻戦争 開幕 | 52

第九話 開戦の日 | 58

第十話 英雄、再び | 65

第十一話 問おう、誰があなたのマス | 74

第十二話 オリジナル | 79

ターカ | 74

番外編

その1

「む………は……?」

気づいたら私は、何もない空間に1人で立っていた。

いや、正確には奥に人影が……

……嫌な予感がした

「茅場さん、発言良いか。俺の名前はエギルだ。」

「……」

数m先から話しかけてきたのは、イカツイ見た目をしたスキンヘッドの男だった。

……おまけに言うど、猫耳をつけていた。

「ここは……」「なんでや」みたいなことを言ったほうが良いのだろうか……?」
いや、なぜこちらを向く。

「茅場さん、あんたの言いたいことはつまり、「俺の名前はエギルだ」ということだな？」
「ちよお待ってんか!」

あ、やばいこの声は嫌な予感しかない

「ワイはキバオウつてもんや。そいつと戦う前に、言わせてもらいたいことがある!」
え、いま僕を指ささなかった?なんで戦う対象にされてんの?

「キバオウさん、発言いいk……」

「なんでや!!」

キレーなツツコミですなー相変わらず。

あー、エギルさんがしょんぼりしてるよ。なんかちよつとかわいい……
ん?なんだ?向こうに人影が……

「なんやて?」

いや向こうに人が……つていうか地の文に入ってくんな

「あれは……ディアベルじゃないか?」

うおおつ!びつくりした!急にどっからともなくキリトが!

「ディアベルはん!」

キバオウが駆け寄ろうとする。

．．．ん？なんだ、上からなんか．．．

「え

凄まじい風と音だった。その音に混じってかすかにだれかの断末魔が聞こえた気がしたが、気のせいか。

空から降ってきたそれは――

イルファング・ザ・コボルドロードだった

落下してきたそいつから数m離れた場所に、横たわる人影

あ、めっちゃデジャヴ

「ディアベル!!」

キリトさんが駆け寄りました。よし、次の展開は読めた。

「キリトさん……頼む……ボスを……」

そう言い残し、ディアベルは息絶える。体がポリゴン片となつて四散、いや爆散した。

「……っ!!」

そうだ、これでキリトがアスナと協力してボスを倒すんだつたよね。

アスナ今いないけど、今のキリトならソロでいけんだろ、がんばれー

キリトが剣を構え、駆け出した。このまま……

「なんでや!!!」

ふえっ??!!

「!?!」 ↑キリト、立ち止まる

「なんでディアベルはんを見殺しにしたんや!」

今かよ!もうちよい待てよ!

「見殺し……?」

キリトも応じるな!うしろ!うしろ!

「ジブンは前にいたのがディアベルはんだつて、知つとつたやないか!」

え、ちよ、まじ危ないよキリトさん

なんかあいつ武器持ち替えて……

「それは……」

イルフアングが走り出した。

あ、死んだなこれ……

と思つた次の瞬間、頭と体を一切動かさずにキリトの腕だけが高速で——
おお、これ知ってる……！「もう切つた。」っていうやつだ！

そして次の瞬間——

凄まじい音とともにポリゴン片となつて爆散する、キリトの体。

え、どゆこと……？

「キリト——！！」

エギルさん……？

「おい、おまえなんてことを……！！」

え、ぼくですか……？というか猫耳つけたままでそんな怖い顔されてもw

「おまえがフラグを立てたからキリトが死んだんじゃねーか！！」

え……あ、

——おお、これ知ってる……！「もう切つた。」っていうやつだ！

あれかよ！

「なんでやー！」

・・・ふえ!?

「なんでキリトはんを見殺しにしたんやー！」

見殺してて・・・あれ、てかそもそもお前のせいじゃね？

「ジブンはボスが来てること、しつとつたやないか！」

待て待て待て！落ち着けて！

「発言良いか。」

おっとなんだ嫌な予感しかしないぞ

「なんや」

「キバオウさん、あんたの言いたいことはつまり「俺の名前はエギルだ。」ということだなっ。」

「なんでやー！」

なんでやー！

「・・・私がいることも忘れないでほしいのだが・・・」

あ、茅場さんがいるのすっかり忘れてた。

「というか最初は私視点で始まっていたはずなのだが・・・?」
あれそうだった

キリトくん、そして蒼氏までもがこいつの餌食になってしまった。だが、これでいい。

「ご苦労だった、エギルくん。これで私の計画のじやまになるものは消えた。」

「気にすんなよ、茅場さん。俺は報酬が貰えればそれでいい。」

「ふむ、これでどうだろうか。」

「ありがとよ、またいつでも呼んでくれ。」

「……………」という夢を見た

「どうやら俺は茅場と戦いの様子をモニタリングしている最中に寝てしまったようだ。」

「……………なあ。」

「なんだね、キリトくん。」

「エギルってプレイヤー……………覚えてるか?」

「ああ、何度か攻略会議でも見かけたが……………彼は中層プレイヤーの育成に尽くしたそうだな。」

「……………それで?彼がどうしたのかね?」

「……………いや、なんでもない……………」

第一部 第一章 プロローグ

第一話 すべての始まり

「……………ここは……どこだ？」

気づいたら俺は何もない空間に一人で立っていた。

「……………いや、正確には奥に人影が見える。」

なんとなく嫌な予感がした。

「目が覚めたかね、キリトくん。」

嫌な予感は的中する。そこには白衣を着た男が座ってモニターを見ていた。

「茅場……」

そう、この男こそデスゲームと呼ばれた「ソードアート・オンライン」のプログラマー・茅場晶彦その人である。

なぜここに……………と思ったが、今の茅場と会える場所なら大体想像はつく。

「あんたに会うのも随分と久しぶりだが、どうせまたネットワークに散らばった意識の一部なんだろう？」

俺は余裕があるように装って尋ねる。

「そこまでわかっているのなら、もう説明はいらないだろう?」

茅場はこちらに振り向くと、淡々と答えた。

「まあ、そうだな。ところで一体ここはどこなんだ? 仮想空間か?」

俺はやつとその疑問を口にする。

しかし、返ってきたのは全く予想のしていなかった一言だった。

「夢だ。」

「………は?」

思いも寄らない言葉に俺は困惑する。

「困惑するのも仕方ない。実際、このわたしでさえ、この状況をまだ飲み込めていないのだから。」

珍しく茅場は焦っているようにみえた。

「まずはこれを見たまえ。」

俺は茅場の視線の先のモニターをみる。

「………!!?」

そこに映されていたのは——
激しく剣をぶつけあう二人の……「俺」だった。

「まずはどうしてこのような事態になってしまったのか説明しよう。」

「ああ、頼む。」

俺は心が落ち着かないまま、とりあえず茅場の話を聞くことにした。

——数分前のこと。

俺は信じられない光景を目にした。

異なる姿をした二人の俺が戦っていた。いや、殺し合っていたというべきか。

片方は、俺にとって懐かしい姿をしたアバターだった。

二刀を操り黒いロングコートをはためかせるその姿は、「黒の剣士」と呼ばれた俺そのものだ。

それに対して相手は両手剣と見間違うほどの大剣を振り回し、そして……飛んでいた。

おそらくALOでのアスナ救出時の姿だろう。

しかし、なぜだ——

俺はここにいるはずだ。過去を見ているにしても、それでは画面に映された光景の説明がつかない。

必死に考えたが、答えは見つからなかった。そこで茅場の説明を聞くことにしたというわけだ。

「キリトくん。私は先程、この世界は夢だ、といった。だが正確にはちがう。この世界はある人物の強い感情によって生み出されたのだ。」

「ある人物？」

「つい三週間ほど前のことだ、この世界が生まれてしまったのも、私と彼女たちが呼び出されたのも……」

「う．．．．．」

結城明日奈ことアスナは、見覚えのない空間で目覚めた。周りを見渡す、すると．．．

「直葉ちゃん!?!」

そこにはうつ伏せに倒れ込む黒髪の少女、桐ヶ谷直葉がいた。

「ん．．．ア．．．スナ．．．さん．．．?」

「良かった．．．。」

「ここは．．．?」

直葉も、アスナと同じ疑問をもったようだった。

「わからないの。わたしも、気づいたらここにいて．．．。」

もう一度周りを見渡す。しかし、他には誰もいないようだ。

「．．．その時だった。」

少し離れた空中に突然ゲートのようなものが現れ、その中から人影が．．．落下して

きた。

女性のようなだ。床に無造作に落とされた体は華奢だった。

「・・・!？」

体の感覚が戻り始めてきていたアスナは、すぐに駆け寄ろうとする。しかし、それを遮るようにゲートが次々と現れ「—————」

そして数分後…

「まさか里香さんたちまで落ちてくるなんて、びっくりしましたよ。」
笑いながら直葉が言うと、

「あんたねえ・・・、そんなのんきなこと言ってる場合じゃないでしょうが・・・。」
と篠崎里香ことリズベットが呆れた様子で返す。

「里香さんの言う通りですよ直葉ちゃん。」

「全くだわ・・・。」

綾野桂子ことシリカと、朝田詩乃ことシノンが同意する。

「あれ、なんか散々な言われよう・・・。」

「あはははは・・・。」

アスナが思わず苦笑いする。

「ところで、なんでしののけだけアバターなの？」

アスナがふと尋ねた。

「GGOでスコードロン戦の真っ最中だったのよ。急に目の前が真っ暗になって……」
「でも、あたしたちは気がついたらここにいたわよね、桂子？」

リズが聞くと、シリカは首をかしげて

「不思議なことに直前に何をしていたかもよく覚えてないんですよね……」

「私もそんな感じかな。」

「あたしもです。」

アスナと直葉が共感したようにならずにいる。

「とりあえずここは一体どこなのかを……!!?」

リズが言いかけてやめた。その理由をすでに全員……じゃない、シリカ以外は悟っていた。

首をかしげるシリカの後ろに、仮面をつけた男が立っている。

そして……

彼女たちからは見えていない仮面の裏からは、頭に巻いた悪趣味なバンダナが丸見えだった。

第二話 ヒロインたちの決意

「……全く気づかなかった……！」

アスナは自分の察知能力にかなり自信がある。だからこそ、仮面の男の接近に気づけなかったことに動揺してすぐに動けなかった。

男の手がシリカに迫る……。

「きやあつっ!!……って……あれ？」

男がシリカを……抱き上げた。

「「え……」」

そりやもう見事なまでのお姫様抱っこだった。

アスナたちが混乱していると、ようやく男が口を開く。

「安心してください。女性を傷つけるなんてこと、オレ……私は致しませんよ……。」

聞き覚えのある声だった。

「ん……？」

「あり・・・？変声機が機能しねえぞ・・・どういうことだ？」

口調が崩れたことで全員が確信した。

「「「クライイン（さん）・・・？」「」」」

しばしの沈黙・・・。

「ちくしょう・・・。。ばれちまったじゃねえか！しょうがねえ、正直に白状する。お前らをここに呼び寄せたのはオレだ！」

という突然のカミングアウト。

するとすかさずリズが、

「嘘言わないでよ、あんたにそんな力があるわけ無いでしょうが。」

悪ふざけもいい加減してくれ、とでもいうように首を振って言う。

「オレにもよくわかんねえけどよお・・・茅場のやつがよ・・・。。ともかく！おまえらに「正妻戦争」ってやつをやってももらうために、オレはここへ呼んだんだ！」

「「「正妻・・・？」「」」」

リズはきつぱりと言い切った。

「で・でも！そんなことしてもし・仲間の絆が壊れてしまったら・」
アスナがいまにも泣き出しそうな顔で言う。

「もうそんなこと言ってる場合じゃないんですよアスナさん。」

「す、直葉ちゃん!？」

「キリトくんは・お兄ちゃんは誰にも渡さない!!」

直葉もリズに触発され吹っ切れたようだ。

するとそれに続きシリカ、シノンまでもが・

「あたしもキリトさんを渡す気はありません!」

「そういうことなら私も負ける気はないわ。」

「みんな・」

アスナは最後の最後まで葛藤し続けた。

だが、正妻の座を譲るわけにはいかない。

「私も・負けない!」

第三話 戦の地へ

「いいか、お前らにはキリトの正妻の座を賭けて七人で戦ってもらう。これだけは絶対だ。」

「七人……？それだとあと二人足りないわよ？」

シノンが再度メンバーを数え直し、尋ねる。そうだ、この場には女性陣は五人しかない。

「あとから来るはずだ……たぶん。とにかく、ルールの説明に移る。お前らには決着がつくまである都市にいつて戦ってもらう。それがどこかはオレにもわからねえが……都会でも田舎でもねえ地方都市だと思う。そして、二週間は体裁を整える準備期間とする。その後はいつでもどこでも戦闘OKだ。ただ一般住民もいるから、真つ昼間は避けたいほうがいいと思うがな。それと……」

「ちよつとまっつてくさい！」

シリカが挙手して話を遮る。

「戦闘ってことは実際に戦うんですか？それだとあたし、勝ち目がない気がするんですが……」

「……確かにそうだ、それに強きで正妻を決めるというのも納得できない。」

説明を聞いていた全員が思ったことだった。

「いや、説明する順番を間違えた、すまねえ。お前らには、「キリト」で戦ってもらおう。」

「はい？」

シリカが、言っている意味がよくわからない、というように疑問符を浮かべる。

「簡単に言うんだな、それぞれが「キリト」として強く印象を持っている姿のキリトを相棒として戦うんだ。つまり、これがわたしにとつての「キリト」！ってわけだ。」

なるほど、と女性陣が頷く。

「それもあんたのバカみたいな夢の中だからできるってわけね……」

リズがぼつりとつぶやく。

「これで大体説明は終わったが……遅えな……」

「誰がよ」

「アリスとキリトの後輩の……なんだったか……」

えーつと、とクラインが頭をかく。

するとアスナがハツとして言う。

「もしかしてロニエさんのこと……!?」

「そうだそうだ!ロニエだ!」

まさかあの二人まで参加するなんて……、とアスナが考えていると。

「もう始めちまえばいいか!よし、それぞれバラバラのところに飛ばすからな、味方でののは今のうちだ。挨拶でも済ましとけ。」

「……あんた、そういうところだけは優しいのよね……。」

とリズが苦笑い。

—————数分後

「よっし、じゃあ飛ばすぞ。」

「あ、ちよつとまってください。」

シリカが止めた。そして隣に立つリズの手を取る。

「リズさん、お互い頑張りましょうね!あたし、リズさんとなら、どんな結果になっても仲良しのままでいられる気がするんです!」

「シリカ……。」

リズの目元が光った。普通だったらちよつと感動するシーンなのだろう。

第四話 観戦者たちの憂鬱

「……まさか、クラインがそんなことを考えていたとは…….」
というかオレが悪いのか？

俺は意外にもあつさりとバレた事件の黒幕にも衝撃をうけたが、その言い分にとても納得はできなかった。

だが、それよりも俺は「正妻戦争」とやらについてひとつだけどうしても言いたかった。

「あのさ……」

一度呼吸を整えて、俺はこの場で唯一会話ができる相手、茅場晶彦に向かって叫んだ。

「…….俺の意思は!?」

「…….」

茅場はあいかわらず真顔で、黙ったままだった。

しかし、俺はそんなことはお構いなしにまくしたてる。

「俺の意思は!?俺の正妻なんだよね茅場さん!?アイツラ何勝手に決めちゃってんの!」
「落ちて駆けキリトくん!キヤラが完全に崩壊しているっ……!!!」

*****しばらくお待ち下さい*****

「えっと……すまない……茅場。」

俺はやっと落ちついた。一応茅場にも謝っておく。

「君が素直に謝罪するとは珍しい。だが、一つ言っておこう。今回の件については、君の意思が尊重されないのは当然とっていい。」

茅場は妙に冷たい声で言った。

「なぜだ……!?俺は特に何もした覚えはないぞ……?」

実際、本当に茅場の言っている意味がわからなかった。

「……それだよキリトくん。その無自覚さが、今回の件を招いてしまった。君自身はア

スナくん一筋のつもりかもしれないが、どうやら周りの女性たちのほとんどに思わせ振りの態度をとっているようじゃないか。特にゲーム時空で。」

「そんなつもりは……」

本当になかった。というかゲーム時空とは？

「そんなつもりはない、か……無自覚系ハーレム主人公とはそういうものなんだろうな。」

「茅場……?」

先程の会話の中で違和感を感じて考えたところ、今のこの状況と全く関係のない疑問が、頭に浮かんでしまった。

「なんかおまえもキャラ変わってないか?」

「……気のせいだ。」

茅場は真顔を保っていた。本当によく分からない男だ。

「なあ、ところであんた最初にこの世界がある人物の強い意志によって作られた、とか言ってたよな。それが結局クラインだったのか?」

俺はまだ、この事件がクラインの仕業ということにあまり納得できないでいたのだ。

「そういうことになるな。君の場合もそうだったが……本当に意思の力というものは私をいつも驚かせる。」

「……アイツと一緒にするなよ……。」

「ふむ、どうやら成功したようじゃな。」

学者のような格好をした幼い少女が、ホッと息をつく。

するととなり立つ女性ががっくりと肩を落として言う。

「はあ……なぜ私だけ……。」

彼女の名前はソルティリーナ・セルルト。修剣学院時代のキリトの指導生だ。

「しようがないじゃろう、向こうへ送れるのは3人が限界だったのじゃから。」

特徴的な口調の彼女はカーディナル。通称・もうひとりの最高司祭だ。

カーディナルは遠くを見るように目を細め、悲しげな表情でつぶやく。

「・・・できることならわしも参加したかったのじゃが・・・」
「カーディナル様・・・？」

カーディナルは未練を振り払うように首を振り、

「今から言っても仕方のないことじゃ。むしろは戦いの結末を見届けるとしよう。」
と言うと、あいかわらず未練たらたらなソルティリーナの肩を叩いた。

第1部 第2章 正妻戦争 開戦前

第五話 開戦前 -アスナとリーファー-

「あれ・・・？ここは・・・」

アスナが気がつくのと、そこには見知らぬ街並みがあつた。

「……」たしかクラインさんの話を聞いたあと・・・

「じゃあ、ここが戦いの場所・・・」

クラインの言つたとおりなんの変哲もない、どこにでもありそうな地方都市である。

アスナはその郊外の住宅街にいた。

「ほんとうにこんなところで戦うの・・・？」

見える限り、住宅街は平和そのものだ。散歩の老人や下校中の小学生の集団。争いなんてまるで起こりそうもない。

アスナはとりあえず周辺を見て回ることにした。

住宅街を抜けると、大通りに出た。それなりに発展しているようで、コンビニやファ

ミレス、書店などの店が並んでいる。

アスナの足は自然とコンビニ二へと向いていた。

中に入ると、おなじみの入店音が流れる。

ふと、新聞が目に入った。日付を確認する手段の鉄板である。

日付は――

平成17年 6月22日 水曜日

アスナが生まれる、二年前だった。

「はあ．．．やっぱり．．．」

街並みを見たときに違和感を感じたのはこのせいか．．．

見知らぬ場所に飛ばされたのだ。時間の移動にさして驚きはなかった。

そういうえば時間はわかったが、ここは日本のどこなのだろう。

何も買わずに出るのはなんとなく気が引けたが、アスナは店を飛び出し入り口の自動

ドアに書いてある店名を見た。

「フレンドマート ―桐崎東店―」

――桐崎．．．!?

アスナは自分の記憶を探し回ったが、そんな名前の都市は聞いたことがなかった。ポケットをまさぐり、スマートフォンを取り出す。

「……いくら調べても、桐崎市という地名は出てこなかった。

アスナは少しばかり期待していたのだ。さっきまでの話は全て悪い夢、もしくは誰かの悪ふざけなんじゃないかと。

「みんなと戦うなんて、私には出来ないよ……」

しかし退路を断られた以上、覚悟しなければならぬ。

「みんなとは戦いたくない、でも……」

「でもキリトくんは誰にも渡したくない、ですか？」

「……!?!」

いきなり横から聞き覚えのある声が出て、アスナはおもわず身構えた。

そこには、金髪のポニーテールの少女がいた。

「リ、リーファちゃん!?!」

桐ヶ谷直葉ことリーファは、まくしたてるように言う。

「いいですか、アスナさん！いつまでもそんな甘いこと言ってるからだめなんです！キリトくんを渡したくないなら、自分の力で手に入れるんです！戦いたくないだなんて

言ってる場合じゃないですよ！」

「リーファちゃんはそれでいいの!?!だって、だって……」

「私にはお兄……キリトくんを手に入れるほうが大事です。」

「そんなっ……!!でも……!」

いつまでも悩み続けるアスナに、リーファもかすかに苛立ちを覚える。

「この前の決心はどうしたんですか!?!それともあなたにとつてキリトくんはそこまでのものじゃないと!?!」

「……!!」

その言葉は、葛藤するアスナの心にかかなりの衝撃を与えたようだった。

「……場所を変えましょう、アスナさん。」

いつの間にか周りには人が集まってきていた。大通りのコンビニの目の前なのだからとうぜんだろう。

リーファがアスナの手を取って歩き出そうとすると、強引にその手が振りほどかれた。

「……その必要はないわ。」

アスナはキツと前を見て言った。

「ごめんね、リーファちゃん。私、やっぱりキリトくんは誰にも渡したくない。だから」

ら……戦う。」

アスナの目からは確かな決心が読み取れた。それをリーファも感じ取ったようで、
「……今度こそ、信じますよ。」

と言いつつ、彼女は去っていった。

一方、そのやり取りを影で見ていた人物が二人……

「あーあ、わざわざ敵に決心を固めさせるなんて、何やってんだかあの子は。」

「敵に塩を送るってやつですね！リーファさんはやっぱり正々堂々と戦って勝ちたいんですよ。」

リズベットとシリカはコンビニに停車している車の影に隠れていた。

アスナとリーファのやり取りに集まってきた人たちにめちやくちや怪しい目で見られているのだが、会話に夢中な2人は気づかない。

「にしても怖かったわねえ、あのリーファの剣幕！」

「うう、あたし、戦っていく自信がなくなってきました……」

彼女たちはアスナを見かけて声をかけようとしたのだが、リーファの剣幕に押されて、出るに出不れなかったのだ。

「大丈夫よ！なんたつてあたしたちだけ2人なんだから！」

「そ、そうですね！なんとかなりますよね！2人ですから！」

表面上は笑いながらも、裏で二人は同じことを考え、お互いに言えないでいた。

「……あれ、あたしたちが勝つたら、正妻決まらなくなる……？」
「……ということとはつまり……」

「……あたしたちが勝つことはないと思われてる……!?」

第六話 開戦前 —シリカとリズベット—

——ヒーロインたちが桐崎に降り立ってから一週間が経過した、6月29日。彼女たちはそれぞれ住居・収入源を確保し、順調に準備を整えつつあった。

一週間が経過してわかったことは、

- ・この場所ではSAOやALOのようにメニューウィンドウが開けること
- ・ヒロインたちは全員がアバター姿であること。
- ・身を守るための帯剣は可能だが、防具は身に着けられないこと。
- ・キリトしかソードスキルは使用できないこと。
- ・戦う手段であるキリトを呼び出すには自分の中のキリトのイメージを確立させ、はつきりと思ひ浮かべなければいけないこと

・アリスとロニエはどうやらもう来ているらしいこと

・リーファ、シノン、アリス、ロニエだけがすでにキリトを連れてきているということ

おそらくリーファ、シノン、アリス、ロニエはあまり多くのキリトの姿を知らないため、イメージの確立が早かったのだろう。一方ですべての世界をキリトと渡り歩いてきたアスナや、アスナほどではないにしろSAOからのつきあいであるリズやシリカはな

かなかイメージを確立させる事ができなかった。

桐崎市内の喫茶店――

「見せつけるようにイチヤイチャしちゃって、何なのよもう……」

リズとシリカは作戦会議のために話し合っていたのだが、そこにリーファとキリトが入ってきたのだ。

「でもあたしたちの場合、呼び出せても取り合いになりませんか？」

「そうなのよねえ……」

リズがテーブルに突っ伏す。向かいのテーブルではリーファとキリトが楽しそうに話していた。

「あれがリーファさんが呼び出したキリトさんですか……」

そこにいるキリトは、リズやシリカにはあまり馴染みのない姿のキリトだった。

黒ずくめの姿はあいかわらずだが、ツンツンと逆立った髪に吊り上がった目、浅黒い肌……やんちゃな少年といった雰囲気だ。

「ALOでユイちゃんに言われて髪下ろす前のでしょ？」

確か、アスナを助けに行ったときにリーファと知り合ってたって言うってたから、やっぱりリーファはあれに思い入れがあるんじゃないかしら。」

「あたしたちは、どうなるんでしようね・・・」

シリカは不安そうにつぶやく。

「あたしたちの場合、二人の思い浮かべるキリトと一緒にすればなんとかなるような気がしなくもないけどねえ。」

彼女たちは二人一組で参加しているがゆえに、二人のイメージするキリトに食い違いが起こってなかなかうまくいかないのだ。

「じゃあ、リズさんの思い浮かべるキリトさんは、どれなんですか？」

「もちろんSAOの黒の剣士（二刀流）に決まってるじゃない！」

それ一択！という風にリズが得意げに言う。

それを聞いたシリカは、

「はああ、やっぱりそういうことですか・・・」

とため息をつきながら言う。

リズはシリカの言っている意味がよくわからないのか首をかしげている。

「よく考えてみてください。そのキリトさんはほぼほぼアスナさん専用みたいなものじゃないですか。おそらくすでにアスナさんが呼び出したか、優先されてるんだと思いますよ。」

「えー！そんなのズルいじゃん！」

「……あたしたちが七人に入れた事自体がもう奇跡なんですからそこは譲りましようよ……」

「えー……」

リズは納得がいかないようで、必死に足をばたつかせて駄々をこねていた。

彼女たちの参加は、一生懸命に「MORE DEBAN」と書かれた看板を掲げる彼女たちを見たクラインが同情して与えてくれた枠なのだが、それは知らないほうが良いだろう。

「じゃあ一体どうするっていうのよ。」

リズの問いかけに、シリカは少し悩んでから切り出す。

「まずはキリトさんたちについて整理しましょう。」

シリカはテーブルの横においてあるナプキンを一枚取り出し、お客様アンケート用のボールペンも一緒にとって、次のような表を書き始めた。

アスナ S A O ー 黒の剣士 ー 二刀流

リーファ A L O ー ツンツン

ヘアー

シノン G G O

アリス U W ？

ロニエ U W ？

「こんなところですかね・・・」

書き終えたシリカはどうも腑に落ちない様子で図を眺めていた。

「この「UW」？」ってのは何？」

リズが質問するとシリカは思考を中断し、答える。

「えーと、アリスさんとロニエさんは今の所まだ会えてませんけど、ふたりがしているのはアンダーワールドのキリトさんだけなので、その中の誰かって意味です。」

「へー、でもよくよく見ると、いくらいろんなアバターを持つキリトでももうそんなに残ってないんじゃない？」

「確かに・・・あと考えられるのは、SAOであたしと出会った頃のキリトさんか、ALOの今のアバター・・・あつ！ それとオーディナル・スケール！」

すっかり忘れられていた、「現実世界」のキリトの存在を思い出したようだ。

「でも、あたしたち的にはやっぱALOよねえ。」

「まあ・・・そうですかね。」

リズの意見に賛同しながらも、シリカの目はさつき書いた図に向けられていた。

何か引つかかるらしい。

「ねえ、リズさん。あたしたち、2人1組ってことは1人扱いなんですよね？」

「呼べるキリトが1人分なんだからそうでしょうよ。」

シリカはもう一度図を眺め直す。そして結論に辿り着く。

「・・・リズさん。この戦いに参加している人数が、どう考えても6人なんですけど・・・」
「え？そんなわけないでしょ。クラインのやつだってそういうところはちゃんとしてるじゃない。」

「リズさんって意外とクラインさんへの評価高いですよね。」

「今関係ないでしょそれ！」

「あはは・・・すいません、つい・・・」

おほん、と咳払いをして、シリカは一呼吸置いてから再び話しました。

「リズさん、とりあえずこの戦いに参加している人の名前をあげてみてください。」

「え？あたしとシリカ、それにアスナとリーファとシノンと・・・アリスとロニエ？」

「何人になりますか？」

「えっと・・・七人？・・・ってあれ？あたしたちが1人扱いってことは・・・6
!？」

「やつぱりおかしいですよ！」

「いやあ、でもクラインのことだから、数え間違えただけじゃないの？」

「・・・そうでしょうか・・・ならいいんですけど・・・」
こうして、シリカだけがモヤモヤしたまま会議は解散となった。

「カーディナルさん、ありがとうございます。わがまを聞いてもらって。」

「良いのじゃ、礼ならそこで意気消沈している奴に言え。」

「もう大丈夫ですって！カーディナル様！」

「しかし驚いたな・・・まさかお前が・・・」

「

」

「

第七話 開戦前 ―シノンとアリス―

――これは前回の話の一週間前、つまりヒロインたちが桐崎へやってきた日、6月22日のことである。

その日シノンが目覚めた場所は、不運にも桐崎市内の高校の教室だった。時刻は17時12分、幸い教室には誰もいないようだったが、早く出なければただの不法侵入者だ。「あいつ……場所くらい考えなさいよ……」

あいつとはもちろんクラインのことである。

シノンはため息をつき、とりあえず教室を出ようとした。

その時、突然教室の後ろ側の扉から女子生徒が入ってきた。

――まずい、隠れないと……!

しかしもう間に合わない。諦めたシノンは、無言で歩いてくる女子生徒に顔を向けた。

「……!?!」

シノンはその女子生徒を知っている。彼女は――

すると、1mほどまで近づいてきた女子生徒が、ようやく口を開く。

「目が覚めましたか、シノン。」

「アリス……」

そう、そこにいたのは整った顔立ちをした金髪碧眼の少女、アリスだった。

しかしなぜ制服を着ているのか。

「逃げたり隠れたりする必要はないと思いますよ。私達は、この学院の生徒の扱いのようですから。あのクラインという男も、案外ちゃんと考えているのですね。」

「生徒……?」

シノンは自分の服装を見下ろした。

彼女は、アリスと同じ制服を着ていた。ブレザーの胸の部分には星のようなマークが付いていた。校章だろうか。

「あなたは どうしてここに いるの?」

「私もこの教室で目覚めたのですが、となりにいたあなたが全く起きる気配がないので他の教室へ言ってみたのです。そうしたら、こんなものが……」

アリスは手に持っていたプリントの束を、シノンに渡した。

「……これってクラス名簿じゃない。」

アリスは目覚めたあと、せっせと放課後の教室を回ってクラス名簿を拝借してきたら

しい。

「それって勝手に持ってきたらまずいんじゃない？」

「そうなのですか？ 大きな机の上に置いてあったので、てつきり持っていて良いものかと。」

アリスはきよとん、とした顔で言う。アリスの凛々しい騎士としての姿を見てきたシノンにとっては、なんだか拍子抜けだった。

「後で返しに行くわよ……」

不満そうな顔をしたアリスだったが、すぐに表情を戻して、話すことを思い出したようだ。

「そうでした。シノン、これを見てください。」

アリスが指を指したのはこのクラスの名簿だった。

2年6組 1番 ーーー

2番 朝田詩乃

3番 アリス

8番 桐ヶ谷和人

「桐ヶ谷……和人……!!」

「次に、これを見てください。」

2年2組 1番 ーーーー

2番 ーーーー

9番 桐ヶ谷和人

「え……? どういうことよ……これ……」

「これだけではありません。1組と9組にも同じ名前がありました。そして……」

アリスは机の上にプリントを広げ、制服のポケットから取り出したマーカーで線を引き始めた。

彼女が何をしているのか、一体何を言いたいのか、シノンにはなんとなくわかっていなかった。

「できました。これを見てください。」

そこにはプリントの束から取り出した8枚にマーカーで線が引かれていた。

2年1組 2年2組 2年6組 2年9組

1年1組 1年3組

3年7組 3年9組

「このクラスに、キリトや．．．アスナ達がいるのね？」

「そういうことのようにです。この学院にいるのは、私達、シリカ、リーファ、ロニエ、アスナ、リズベットとキリト4人．．．しかしキリトは全員が不登校の扱いになっていました。」

「どこで知ったのよそんなこと．．．」

アリスが答えようとしなかったので、シノンに触れないでおこう、と思いあまり深く突っ込まなかった。

「おそらくですが．．．私達が呼び出すというキリトのための学籍ではないかと思うのです。あの年齢で学校に行っていないというのも、リアルワールドでは不自然のようです。」

「中卒で働く人も一応いるけど．．．いえ、なんでもないわ。でもそうになると、なんで

4つしか学籍がないのかしら?」

「それについては、私やロニエが19歳以降のキリトしか知らないためかと思ったのですが……」

「ああ、そういうことなら納得できるわ……ね……?」

何かおかしい。そう思った。

「ねえ、アリス。」

「なんですか?」

「この学院に籍があるキリトは4人なのよね?で、アンダーワールドから来たあなた達は、2人……?」

「はい……あれ、おかしいですね。それでは数が合いません。」

「いや、もしかしたら私達のうちの誰かが19歳以降のキリトを呼び出すつもりなのかもしれないわ。」

「……そう、ですかね。その可能性は低いと思いますが……」

「でもそうならないと数が合わないもの。アスナとリーファ、私はたぶんもうどのキリトにするか決まってる。リズとシリカは……多分アンダーワールドとかではないんじゃないかしら。だからこれで4人になって、残った……あれ?誰が残ったの?」

「誰も残りませんね．．．．．どういうことですか？」

「どれだけ数えても、そもそもこの正妻戦争への参加が7人になってないわ！シリカとリズベットがひとりあつかいになったんだから、当然だったのよ．．．．」

「．．．．!!思い出しました、シノン！たしかカーディナル様が私達2人をこちらの世界へ送ったときにおっしやっていたんです。もうひとり自分に「こんたくと」を取ろうとした者がいる、と。」

「アンダーワールドから．．．．．もうひとり．．．!?」

「私は意識を失う直前、その姿を見たはずなんです．．．．．う．．．!?」

突然硬直し、目を限界まで見開くアリス。その視線の先には．．．．．

亜麻色の髪の少年がいた。

「エンハンス・アーマメント」

シノンは、かすかに聞こえたキン、という音と、その直後に発せられた短いその言葉だけを聞き、意識が途絶えた。

1枚のプリントが舞い上がった。

2年3組 1番 | | | | |

2番 | | | | |

3番 | | | | |

39番 ー ー ー

40番 ユージオ

彼はそれを手に取りー ー ー

氷漬けになった教室の中で、その少年ー ー ー ユージオはしばらく床に突き立てた愛剣に体を預けて何か呟いていた。

しかし突然フラフラと立ち上がったかと思うと、後方のドアを睨みつけた。

「ひっ……！」

ドアの背後からかすかな悲鳴が聞こえた。

「ごめんよ……. とうしなきやいけないんだ。」

第八話 開戦前 ーロニエとあの人ー

「はあつ、はあつ、早くつ．．．逃げなきゃ．．．．．！」

6月22日ー．．．北セントリア帝立修剣学院・初等錬士ロニエ・アラベルは、見知らぬ土地の見知らぬ場所を全力疾走していた。

彼女はシノン達が目覚めた高校の教室のちょうど下にあるゼミ室で目覚めた後、出口を探してさまよっていた。

その時に見てしまったのだ。

もう二度と会うことはないと思っていたあの人によく似た人影が、目の前の教室に入っていくところを。

まさか、と思い追いかけて教室を覗くと、そこにはー．．．

氷漬けになった教室の風景があった。

ー．．．間違いない、あの人だ．．．．．！ユージオ先輩だ．．．！

ロニエは困惑しながらも安堵し、ドアの影から出ようとした。

しかしロニエは、彼の隣にあるものを見てしまった。

氷漬けになった二人の女性——アリスとシノンだった。

「え……」

ロニエは目の前の光景が一瞬理解できず、硬直する。

ただ、彼女の直感は告げていた。今見つかったら、確実に——

ロニエの心臓の鼓動が、速まる。

極度の緊張状態に陥ってしまった彼女の呼吸はどんどん荒くなっていく。

恐怖で動けない。

——その時

彼がこちらを見た。

「ひっ……!」

恐怖のあまり声が出てしまった。

「ごめんよ……こうしなきゃいけないんだ。」

その一言でわかる。彼は正気だ。別におかしくなっていたり、どつかの最高司祭さんに記憶をいじられていたりしてゐるわけではないようだ。

その事実が、ロニエの恐怖を少し和らげた。

彼が術式を唱えようと口を開いたその瞬間、ロニエは駆け出す。

「デイスチャージ」

打ち出された氷の矢は、ロニエの肩をかすただけだった。

ロニエは振り向かず走り続けた。ユージオも深追いする気はなかったようで、もう見当たらなかった。

——そして現在

「あつた……！出口……！」

構造の複雑な校舎を抜け出し、ようやくロニエは外へ出た。

見慣れない景色。玄関から見える校門のさらに奥には道があり、ロニエにとっては染みのない色とりどりの大きな物体が高速で行き交っていた。

「……が……りあるわーると……なの……？」

リアルワールド人にとっては日常となっている自動車も、彼女にとっては孤独感と恐怖を増大させるだけだった。

この世界へ来た目的すら忘れ、ロニエは泣き始めた。

「助けて……キリト先輩……」

「……ロニエ。」

「……うえ……?」

ロニエは振り向く。そこには……

「泣くなよ、ロニエ。俺で良ければ力になるから。」

上級修剣士・キリトがいた。

「キリト先輩……!」

思わずロニエは彼に抱きついた。キリトはそんな彼女の頭を撫でながら、玄関の方をちらつと見る。

「……………ユージオ……………」

一瞬見慣れた亜麻色の髪が目に入ったような気がした。
「……………気のせいか……………」

それよりも今は、目の前の少女のことが大事だっ

……………
た。いつでも会える相棒よりも……………

「……………キリト……………僕の……………親友……………」
「僕の……………英雄……………」

第1部 第3章 正妻戦争 開幕

第九話 開戦の日

西暦2005年7月6日————

正妻戦争、開幕

その日の朝、アスナは桐崎市内のアパートの一室で目覚めた。

傍らには————そう、キリトがいた。

相変わらずの黒ずくめの格好に、寝るときくらいどうにかならないものかと思いが、アスナは彼の頬をつつく。

今のアスナから見ると、彼はだいぶ幼く見えた。どちらかと言うと弟のようだ。

それも仕方ない、彼女が呼び出したのはSAOクリア時、つまり16歳のキリトなのだ。それに対し今のアスナの年齢は18歳————数字的には1年しか変わらなくて

も、その間に色々なことがありすぎた。

当然、思い出したくもないことまで。

「……ん……アスナ……おはよう……」

「おはよう、キリトくん。」

そう言つてアスナは布団から出る。

「朝ごはん、何が良い？」

「何でも良いよ、アスナの作るものなら。」

「もう……それが一番困るんだけどな」

そんな平和な会話を交わし、アスナは台所に立つ。

冷蔵庫から卵を2個取り出すと、それを計量カップに割り、菜箸を使って器用に混ぜる。

十分に溶いた卵を加熱したフライパンに……

「……その描写、いる？」

ちよ、菜箸おろして！こわい！ てかこつちみんなつ……あ、すみません冗談です何も言っていないです

「どうした？アスナ」

「ううん、なんでもないよキリトくん。もうちよつとでできるから待っててね。」

切り替えはY・・・ちよつ、待って、冗談です何も言つて n

「ちよつとシリカ！今日はあたしの番でしょ！」

「良いじゃないですか、ちよつとくらい！リズさんのケチ！」

「いやあ、あつははは・・・」

最後の苦笑いはキリトである。

真つ昼間の商店街を女の子二人連れでいちやつきながら歩くと、ほぼすべての買い物客の視線を集めることができる。これで証明された・・・じゃなかつた、えーと・・・開戦前ギリギリの一日になつてようやくキリトを呼び出すことに成功したリズベツトとシリカは、今までの借りを返すかのように遊びまくつた。もはや戦いのことな

ど忘れ、今日が開戦の日だということもすっかり忘れていた。

そして、うっかり夜に無防備な状態で外に出してしまった————リズベットが。

シリカがリズの不在に気づいたのは、次の日の朝になってからだだった。だって10時には寝てたもの。

「リズさん……おはよー……あれ？散歩かな……」

部屋を見渡すが、人の気配はない。時計を確認すると、針は8時12分を指していた。「まあ、すぐ戻ってくるでしょ……二度寝二度寝……」

おい、10時間寝てまだ寝るか……

「ふあく、おはよう・・・お兄ちゃん・・・」

「おはよう、リー・・・スグ。」

「これまた別のアパートの、リーファが借りている206号室。」

「なんかその姿のキリトくん「スグ」って呼ばれるのって変な感じ・・・」

「お前がそうしろって言ったんだろ？こつちだってリーファって呼びそうでややこしいんだよ・・・」

「あははは・・・それもそうだね。じゃあお兄ちゃんの好きでいいよ。」

「そんな他愛のない会話を交わしていると、リーファはあることを思い出す。」

「そういえばお兄ちゃん、昨日の夜中外に出ていかなかった？」

「ん？あ、ああ・・・ちよつと・・・コンビ二に・・・」

「まあいいけど・・・少しは休みなよ？もう戦いは始まつてるんだから。」

「ああ、わかつてる。」

「そう言うときリトは、奥の部屋へ入っていった。」

「もう・・・」

「なんだかここ最近、キリトの様子がおかしいのだ。急にどこかへでかけたり、部屋に籠もったり。」

「一応リーファは母・翠から言われた、「思春期男子の部屋、開けるべからず」という教

訓(?)を守ってはいるが……

「……………」

「……………ヒマだなあ……………」

近くの高校に籍があるらしいことは、リーファにも伝わっていた。

しかし今日は大事な要件があるため、欠席したのだ。

「正妻戦争参加者会議」と題されたそれは、表向きは参加人数の確認などとされている。

しかしその実態は、戦いの裏で起こる異変に気づき始めた者によるものであった。

約束の時刻は、今日の13時30分。アスナが参加者全員の住所を把握し、知らせ

まわったのだから驚きである。

どうやって知ったのかについては触れないでおくが。

そして、現在は午前11時過ぎ……

「せっかく午前中はキリトくんとデートしようと思ったのに……………」

最初の頃は彼も色んな所に付き合ってくれたのに、先週あたりからどうも付き合いが

悪い。

それでもリーファは彼のいる部屋へ行くことはせず、ソファに寝そべる。

そしてそのまま寝てしまった。

「リーファちゃん、過去のことをどうこう言っても仕方ないよ。今は……目の前のことだけ考えるの。」

「……そうだよ、リーファ。僕だって……」

様々な光景が視界に現れ、消えていく。

そして、視界が暗転する。

またか————

いつもこの会話のところで、目の前が真っ暗になる。

……彼の声がする。

「 ジオ：

ユージオ!!

えは

のk

「 ユージ

「 一体・・・何度同じ夢を見ただろう
最後には必ず・・・あの、彼の姿が・・・

「……っ！」

この梅雨の時期に珍しく晴れた。

本当なら喜ぶところだろうが、もう真夏かと思わせるような強い日差しの中を全力疾走する彼女にとつては辛いだけだった……

「もう、なんでお兄ちゃんも起こしてくれないのよ……っ！」

額から汗をダラダラ垂らしながら、兄への愚痴をこぼす。

彼女……リーリーファが昼寝から復帰したときには、すでに時刻は13時20分を過ぎていた。

約束の場所は、町外れにある誰も使わないような寂れた公園だ。

よってバス停なども近くなるべく自転車も持っていないため、この暑さの中の全力疾走。

「……っ……はあっ！もう……限界……っ！」

もう視界も霞んできた。熱中症になるのではないかと思いはじめ。

公園まではあと500mほどだが、こんなバテバテの姿で行っても格好がつかないので一度日陰で休むことにする。

「あ……っ……暑い……っ！」

都合よくベンチがあつたので、座つて休む。残念ながら飲み物は持つていない。

「……水……」

このままでは本当に意識が飛ぶのではないかと思ひ始めたその時——道の向こうから、人が歩いてきた。真つ黒なシルエツトの中で、彼の手元だけが赤く光る。

「———こんな町外れに……人……?」

こんな暑さの中黒ずくめの、しかもロングコートに身を包んだその少年は———黒と赤、二本の剣を持つていた。

そう、どこに納刀しているわけでもなく、その手に持つていたのだ。

しかし構えているわけではない。ただ両手に持つて黙々と歩いている。

彼が近づいてくるにつれ、リーファは彼に対して妙な安心感を感じていた。

「お兄……ちゃん……?」

彼が目の前を通過する。一度こちらを見たような気がするが、リーファはそれよりも彼の剣に釘付けだった。

眩しい光の中で、その赤い剣の輝きだけが異様なほど目立っていた。

———あの光・・・まるで・・・人の・・・

朦朧とした意識の中で、美しい赤薔薇の輝きだけが最後まで視界に残っていた
た———

「みんな・・・遅いわね・・・」

アスナは腕時計で時刻を確認する。今は13時40分、約束の時間はすでに過ぎていく。

「もしかして、あたしたちに奇襲をかけるつもりなんじゃ……!」

「確かに……ありますね……!」

「もう……今の状況じゃ、冗談に聞こえないよ?」

おそらく奇襲などということはしないだろう。アスナは彼女たちを信じていた。

しかし……

「三人しか来てないのは、流石に変よ……」

そうなのだ、この場にはアスナ、リズベツト、シリカの三人しかいない。残りの参加者たちはまだ来ていないのだ。

「本当に全員に通知したんでしょね?」

「それは、大丈夫よ……ただ、手紙を見ていなかったらちよつとまずいけど……」
アスナはこの今日のことを参加者たちに通知する際、口頭ではなく手紙を使用した。

彼女たちを信用していないわけではないが、奇襲や監禁の可能性はゼロではなかったからだ。

「そういえば、聞いてくださいよアスナさん!この前、朝起きたらリズさんが急にいなくなつて……心配して探し回つてたあげく、散歩してたとか言つて夕方にフラッ

と戻ってきたんですよ!?! 本当、あたしの1日を返してほしいです……」

「ま、待つてよシリカ! あれは……しようがなかったんだって! ちよつと野暮用で……!」

「リズ……言い訳は見苦しいよ……」

「ちよつとアスナまで!?!」

「リズさん……1日何してたのか、あたしが聞いても教えてくれなくて……」

「そうなの……? どうして……?」

「その……ちよつと言えない事情がありました……」

「……怪しいなあ……」

アスナのジト目、攻撃!

「う……」

「ま、まあなんだって良いじゃない! ちよつと用事があつただけよ!」

リズベットには効果がないようだ……

「はあ……まあ良いわ。プライベートの詮索は良くないわよね。」

そんな調子で平和な会話を繰り返していると、公園の入口から人の気配が。

「……………だれか来ましたよ……………つて……………え……………?」

シリカの声に、残りの2人が振り向くと……………

「キリト……………くん……………?」

第十一話 問おう、誰があなたのマスターか

町の郊外に位置する公園。現在は真つ昼間である。しかしたつた今、その公園にはとてつもない緊張感が走っていた。

「……あれは、本当にキリトくんなの？」

アスナは思わず彼の正体を疑った。なぜなら、目の前にいるキリトの装備がアスナの知らないものだからだ。

特に異質な存在感を放っているのが……そう、彼の左手で真紅の輝きを纏っている剣。

「……あの剣……どこかで……」

「あ……」

そうだ、あの美しい薔薇の彫刻は、あの剣……アンダーワールドにかつて存在した彼の親友・上級修剣士ユージオの形見として精神喪失状態のキリトが絶対に離そうと

しなかった、青薔薇の剣と同じものだ。

「……でも、どういうこと……？ 私の知らないキリトくんは、アンダーワールドでの最初の2年間だけ。つまりその2年間のどこかで、キリトくんがあそこまで本気を出す戦いがあつたつてこと……？」

「……っ!! まさか……!」

アスナの頭に、いつかオーシャンタートルで聞いた比嘉タケルの言葉がよぎる。

「……だから彼はセントラル・カセドラルにある連絡コンソールを目指したんでしょう。菊さん、あなたに全フラクトライトの保全を要請するためにね。それは容易なことではなかったはずですよ。襲撃中のことでログは確認できませんでしたがどうやら彼は公理教会との戦いの中で仲間を失ったようです。」

公理教会との戦い

アスナやシンノンたちがアンダーワールドに降り立つ前に起こった罪人の反逆。

詳しいことは知らなかったが、人界軍の野営地で修道士たちが話していたのを聞いたことがある。首謀者がキリトとユージオであることや、本来公理教会に絶対の忠誠を誓うはずの整合騎士であるアリス・シンセシス・サーテイの反逆については伏せられているようだったが、噂というのは怖いもので、キリトの素性などはすっかり知れ渡ってい

た。

健在だった頃の公理教会をアスナはよく知らないが、アリスやベルクローリのような整合騎士が何人もいるのだ、相当に激しい戦いだったのだろう。それこそ、彼の仲間にも犠牲が出てしまうような。

「間違いない、あれは、公理教会との戦いのときのキリトくん……」

アスナがつぶやくと、リズベットとシリカは「？」マークを浮かべた。

「公理教会……ってなんでしたっけ？」

「ああ、あれよ確か……えーと、アンダーワールドでレンリとかの騎士が所属してた人界の統治組織。」

「そう、それよ。でも……おかしいの。」

「おかしい？」

「どういうことよ？」

リズとシリカがまたもや「？」を浮かべる。

「だって、キリトくんが公理教会と戦ったときに一緒にいたのは、アリスと……あ……いや……でも、まさか……」

アスナは1人で考え込んでしまう。何が何だか分からない様子の子の2人。

——その時だった

「もう話は終わったのか？」

「……!!」

キリトが、ようやく口を開いた。

考えを中断されたアスナは、直接疑問をぶつける。

「あなたのマスター……じゃなかった召喚主は誰なの!？」

「聞かれて言うと思うか?……閃光。」

「……!？」

まさか、彼にそう呼ばれようとは思ってもみなかった。しかし、それによって抱いていた疑念はさらに確かなものになっていく。

「……なら、一つだけ教えて。」

「……なんだ？」

そう答えると同時に、彼はこちらへ歩き出す。

だが、それに構いもせず、アスナは質問を続ける。

漆黒の剣から放たれるライトエフェクト。

「……あなたは本当に……キリトくん……なの……?」

「……それは……」

彼の動きが一瞬止まる。それに合わせて手元の青い輝きが弱まる。しかしその迷いも一瞬だった。

「俺は………剣士キリトだ！」

青く輝く刃が眼前に迫る。

背後から聞こえる悲鳴。

そして――

アスナは目の前が真っ白になった。

第十二話 オリジナル

アスナの心には、いつも彼の姿があつた。

黒一色に身を包み、二刀を構える頼もしい背中。

いつからか、アスナは自分の心の支えとして過去を、あの浮遊城での彼の存在を求めようになつていた。

つまり、彼女は——

「アスナ……！」

今まさに、自分の最愛の人の手によつて、親友が殺されようとしている。

リズベツトは、当然間に割って入ろうとした。

しかし、足が動かない。

「……どうして……!?」

隣りにいるシリカは、状況が飲み込めないのか完全にパニック状態になっている。

「……いったいどうしたら……!」

ふと、耳元で声がした。

「どうして彼女を助けようと思うんだい？」

「……!?」

とつさに振り向こうとしたが、足が動かないため相手の顔は見えなかった。

「誰なの……?」

「その前に、質問に答えて。」

どうして彼女を助けようと思うのか。さつき彼はそう聞いた。考えることもなく、リズベットは答える。

「そんなの、仲間だからに決まってるじゃない。」

「・・・仲間・・・か。でも、正妻戦争に勝つためには彼女は一番の脅威だ。違うかい?」

「あなた・・・どうして正妻戦争のことを!」

「それは・・・」

彼の声が途切れた。その後まもなく・・・

「俺は・・・剣士キリトだ・・・!」

アスナとなにか話していたらしいキリトが、叫びとともに彼女に切りかかった。

「アスツ・・・!!」

リズベットは手を伸ばして叫ぶ。

しかし刃がアスナに迫ったその瞬間、視界は閃光で覆われた。

拡散する激しい光。

「くっ・・・!」

背後にいた彼も予想外だったらしく、かすかなうめき声が聞こえた。

拡散した光が収縮し、アスナの元へ集まって行く。その光の粒子は少しずつ人の形を作っていく……

「キリ……ト……?」

そこには黒のロングコートをはためかせ二刀を背に吊るす少年、そう、彼もまたキリトである。

「まさか……オリジナル……!?!」

後ろから聞こえたかすかなつぶやき。

「オリジナル」

これが何を意味するのか今のリズベットにはわからなかった。

しかしその言葉に過剰に反応したものが一人。

アスナを襲ったあのキリトだ。

「そんな……オリジナル……!?!おい、どういふことだユージオ!」

「僕は……僕は知らない……あの人の仕事だ、きつと」

「くっ、一旦引くぞー！」

するとリズベットを拘束していた謎の感覚は消えた。それと同時に、二人は姿を消した。

「……何が起きたの……？」

本当に、何が起きたのかまだ半分も理解できない。実際、まだアスナが襲撃されてから、まだ一分と経っていないのだ。しかしそれを考えるよりも、今はやるべきことがある。

「アスナっ……!!」

「アスナさんっ！」

シリカと二人揃って彼女たちの元へ駆け寄る。

そして二人がアスナの元へたどり着いたとき、彼女は泣いていた。

となりに立つ彼のことを見つめながら、あふれるほどの涙を流していた。

その光景を見たリズベットが感じたのは、今思えば少しばかりの恐怖だったのかもしれない。